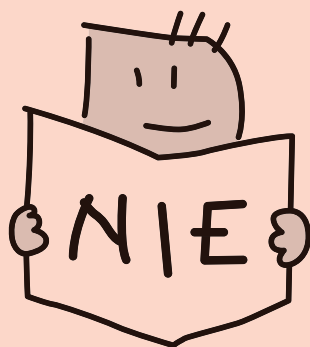


NIE

実践報告書

Newspaper in Education

2024年(令和6年)度 和歌山県



和歌山県NIE推進協議会 編

目 次

◇はじめに	和歌山県N I E推進協議会 会長 船越 勝 (和歌山大学教育学部 教授)
-------	--

【中学校の部】

□ 新聞を用いた言語活動を通じて語彙力と読解力を身につけさせる	1 紀の川市立打田中学校 森下 準
□ 情報を正しく受け取り、考える力を養うために	3 和歌山県立向陽中学校 貴志 佳永子
□ 新聞読み比べ！阪神・淡路大震災の記事を通して ～多面的・多角的に考察する力をつける～	5 和歌山市立河北中学校 下地 浩平
□ 「日常に新聞を ～まずは新聞に親しみ、読んでまとめる～」	7 新宮市立光洋中学校 和谷 征幸・小西 純平・板持 彩

【高等学校の部】

□ 確かな情報を選び取る力を身につけよう	9 和歌山県立和歌山東高等学校 垣内 望
□ 新聞記事と歴史学習で現代の課題を理解する	11 和歌山県立耐久高等学校 佐々木 智礼

◇ 編集後記	13 和歌山県N I E推進協議会 副会長 竹内 圭 (和歌山市立教育研究所 所長)
--------	--

はじめに

N I Eを活用して、 地域に愛着と誇りを持った子どもを育てる —『和歌山県N I E実践報告書』の刊行に寄せて—

和歌山県N I E推進協議会 会長 船越 勝
(和歌山大学教育学部 教授)



新年度がスタートして、お忙しい毎日をお過ごしのことと思います。

新年度も、学校や教室に新聞を持ち込み、N I Eを活用して、言語活動を充実させながら、言語能力を高めるとともに、新聞記事を介して、地域や世界の現実を深く学び、地域社会をつくる主権者、市民に育てる実践を和歌山県全体に広げていきたいと思っています。

さて、総務省は4月14日、2024年10月1日時点の人口推計を発表しました。〔朝日新聞〕2025年4月15日付朝刊〕外国人を含む総人口は、前年から55万人(0.44%)減少し、1億2029万6千人で、減少数と減少率とも過去最大の結果になりました。13年連続で減少幅が拡大し、我が国は人口減少社会の様相をますます強めています。都道府県別でみると、人口が増加したのは東京都と埼玉県だけで、他の45道府県はすべて人口が減少しています。和歌山県は県民人口は88万人で、増減率で見ると、マイナス1.34%です。これは、減少率が最も高かった秋田県がマイナス1.87%で、第8位の数値になります。

他方、リクルート総研が、2025年2月25日に発表した「18歳人口・進学率・地元残留率の動向2024」によると、和歌山県の大学進学率は53.7%で(短期大学、専門学校を含めると73.6%で、近畿エリアでは最も低い)、そのうち地元への残留率(地元の大学入学者数のうち、地元高校の出身者の割合)は18.4%で、近畿エリアでは奈良県に次いで低い結果となっています。他方、他府県への入学者流出先は、大阪、京都、兵庫の順となっています。短期大学の地元への残留率は40.9%で、大学と合わせると59.3%が地元へ残留していますが、逆に言うと、40.7%の高等教育への進学者が他府県に流出しているということにもなります。大学・短期大学卒業後は、地元に戻る学生もいますが、多数が進学先などで就職していくことを考えますと、和歌山県はこれから出生数と死亡数の差である「自然増減」で人口が減少しているだけでなく、進学や就職などの「社会減」で人口減少が進んでいくことが予想されるのです。

こうした和歌山県をめぐる人口動態をめぐる状況を見た場合に、秋田県など多くの自治体も取り組み始めているように、社会減を縮小させるための県内子育て世代への支援の拡充などが政策的選択肢として考えられますが、私は小学校時代からのN I Eの取り組みを通して、子どもたちに地域や地元への愛着と誇りを育んでいくことが重要だと考えています。それは、N I Eの活動にもご協力を頂いている県内新聞各社の記者の方々が、県内各地の様々な取り組み、具体的には、子どもたちの学びの対象となるような自然や歴史、文化、生活の営み、さらには、それにかかわる人たちの想いなど「モノ・コト・人」をていねいに取材し、記事として発信して下さっていますが、それらを子どもたちが小学生から高校に至るまで学び続けることを通して、地元和歌山の持つ豊かさや価値を実感を持って学び、地元への愛着と誇りを身に付けていくことができるからです。こうした記事のコンテンツとしての蓄積は、いわば地元の豊かさや価値を学ぶ「宝庫」ということができます。

しかし、こうしたN I Eを通じた地域への愛着と誇りを育む学びをすれば、和歌山県に定住する人口が単純に増えるとは言えないのも事実です。近年の地域づくりの分野で人口という場合に、「定住人口」や、観光などで訪れる「交流人口」の他に、第3の人口として、定住するわけではないが、地域の様々な事柄に積極的にコミットし、地域の持続的な発展に貢献したいと自主的に行動する人たちのことを「関係人口」と呼び、着目するようになって来ています。たとえば、ダイビングが好きで、串本によく潜りに来ていたが、海底でのゴミの散乱や珊瑚の死滅の広がりが気になり、積極的に串本の海の清掃活動や珊瑚の保護活動にかかわるようになるなどのケースです。これは、交流人口から関係人口への成長と言えるでしょう。その先に、移住というストーリーが見えてくるかもしれません。だから、定住することは難しくても、和歌山出身の子どもたちが就職先から関係人口として和歌山県にかかわり続けるような愛着と誇りをN I Eを通して育てていきたいのです。

最後に、新年度、和歌山県内の学校でこうしたN I Eの実践がさらに広がっていくことを祈念しています。また、私たちの活動にご協力・ご支援を頂いている皆様にこの場を借りまして厚く御礼を申し上げたいと思います。

1. はじめに

本校は、各学年4クラスずつあり、全校生徒は384名の規模校である。本年度新規でNIE指定校に認定された。それまで、学校として新聞の購読はしており、校長室前に毎日の新聞を二紙、図書室にこども新聞や英字新聞を常設している。しかし、あまり授業での取り扱いはなかった。これを機に新聞の利活用を考えていきたい。

最近、ニュースはインターネットやスマホなどで見る人が増え、新聞を購読している家庭は少なくなっている。中間の学年である2年生を対象に、新聞についてのアンケートを実施した。

新聞に関するアンケート（第2学年の生徒 117名）

新聞を読んだことはありますか (授業を除く)	人数(人)	割合(%)
はい	67人	57%
いいえ	50人	43%

お家で新聞を購読していますか	人数(人)	割合(%)
はい	22人	19%
いいえ	80人	68%
わからない	15人	13%

新聞をどれくらい読みますか	人数(人)	割合(%)
毎日読む	0人	0%
たまに読む	26人	22%
全く読まない	91人	78%

普段世間のニュースは何で知りますか (複数回答可)	人数(人)	割合(%)
テレビ	98人	84%
SNS(LINEニュースなど)	83人	71%
家族などから聞く	56人	48%
動画サイト(Youtubeなど)	52人	44%
新聞	9人	8%
ラジオ	4人	3%

新聞と聞いてどんなイメージがありますか(自由記述) 一部抜粋
- 細かい字が沢山並んでいる。 - 堅苦しい難しい内容がのっている - 今はあまり読まれていないイメージ - 敷物にしたり掃除に使ったりと、読む以外の用途で使われることが多くなっている。 - いろんな情報が詰まっている - 読み始めたら面白い

以上のような結果となった。

この結果を踏まえ、初年度となる本年度は、表題にあるテーマを持ちつつ、とにかく生徒に新聞に触れてもらうことを念頭に実践をした。

2. 実践の概要

- ①図書室への特設コーナー
- ②気になる記事しらべ
(教科：総合的学習の時間 対象：第2学年4クラス)
- ③食品に関する記事調べ
(教科：家庭科 対象：第2学年4クラス)
- ④政治経済に関する記事を読む
(教科：社会科 対象：第3学年4クラス)
- ⑤社説の比較 (教科：国語科 対象：第3学年4クラス)
- ⑥よむYOMUワークシート

3. 実践の内容

①図書室での特設コーナー

本校では、NIE指定以前より新聞を二紙購読している（本年度は、読売新聞と朝日新聞）。その新聞は校長室に数日分を常設しており、誰でも手にとることが出来るようになっている。また、図書室にも中学生新聞や英字新聞を常設しており、来室者であれば読むことが出来るようになっている。

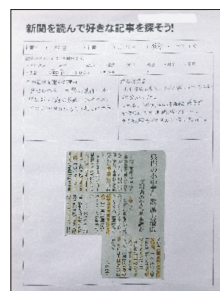
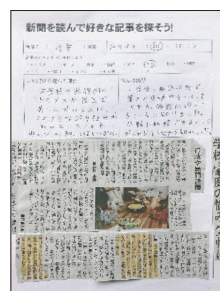
NIEの指定を受けたことで、元々購読していた新聞に加え追加で新聞を購読させてもらっていたので、時事に関する記事を新聞社ごとに比較できるように特設コーナーに掲示した。

②気になる記事しらべ

(教科：総合的学習の時間 対象：第2学年4クラス)

第2学年では事前にアンケートを行った。新聞を全く読まないという生徒が多かったため、新聞に触れてもらうことを目的に、気になる記事を見つけるという活動を行った。活動の前に担任から新聞の大まかな見方（改行やタイトル、広告について等）を説明してもらった。1人に1日分の新聞をランダムで配布し、その中から気になる記事を探させた。そして、記事の中で気になる部分に線を引かせ、ワークシートに取り組みさせた。ワークシートには「新聞社」「日付」「朝夕の別」「ジャンル」「気になった理由」「感想」を書かせ、記事を貼付させた。

取り組む中で普段から新聞に親しみがなくとも苦戦しながらも、各々新聞に真剣に目を通し、気になる記事を探し読んでいた様子が見られ



た。しかし、そもそもの文字の多さに嫌気がさしているような生徒もいたので、読み慣れることが大切なのだと感じた。

③食品に関する記事調べ

(教科：家庭科 対象：第2学年4クラス)

家庭科の食物の単元での取り組みである。食品に関する記事を探し、気になる部分を抜き出させた。この活動は②で挙げた活動よりも先に行ったこともあり、新聞を手にとった生徒の中には、横向きにおいて手前から奥に向かって新聞を開く生徒もいた。しかし、それまでに家庭科の授業の中で食物について学習していたため、どの生徒も意欲的に新聞を読む姿が見られた。

④政治経済に関する記事を読む

(教科：社会科 対象：第3学年4クラス)

3年生社会科の公民分野で新聞を用いた政治経済についての活動を行った。まず、政治経済に関する記事を探した。そして、その記事の内容を要約した。要約してまとめたものを発表するために原稿を書き、クラスの中で発表を行った。

新聞記事には当然専門用語が使われている。生徒の中には書かれている用語が分からずに文章が読み進められなかったり、そもそも漢字が読めなかったりするという生徒もいた。一般向けの新聞を中学生が読むに当たって語彙力の必要性を感じる場面であった。しかし、その中で自らタブレットを用いてその言葉について調べていたので、読めるから読むのではなく、少し難しい言葉が使われているけれども調べながら読み進めることで語彙力の向上が期待できると感じた。また、図書室で生徒同士の話し合いが可能な環境で行ったため生徒同士のコミュニケーションを図ることも出来た。



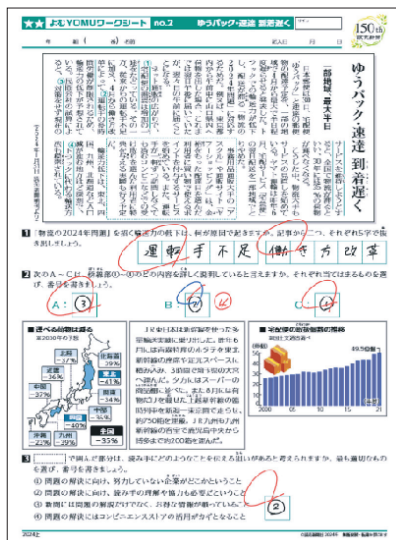
⑤よむYOMUワークシート

(教科：国語科 対象：第3学年4クラス)

国語科の授業の中で、読売新聞の「よむYOMUワークシート」を活用した。

よむYOMUワークシートは、授業の中で時間に余裕のあるときなどに取り組んだ。新聞記事と比較したり図表と記事の読み取りを行ったりを比較的短い時間で取り組めるため、教材として活用しやすかった。生徒達も、あまり苦手意識を持たずに取り組んでいたように思う。(図1)

(図1)

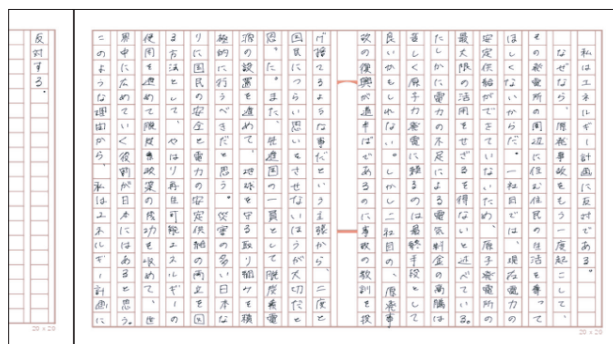


⑥社説の比較作文

(教科：国語科 対象：第3学年4クラス)

朝日新聞と読売新聞の同じテーマ(日本のエネルギー計画)について書かれた社説を比較し、作文する授業を3時間構成で行った。最終的な作文のテーマは「日本はエネルギー計画を至急進めていくべきか否か」とした。1時間目は、社説に出てくる分からない語句を調べ、その上で理解するために必要な知識を集めた。その上で、2つの社説それぞれの特徴や違いをワークシートで行い、読み取らせた。2時間目では1時間目に取り組んだことをもとに、400字～800字の作文を書かせた。作文では、1段落目には賛成か反対か自分の立場を書く。2段落目には理由を書く。2社の社説を比較した内容を明記する。これらを条件とした。3時間目には、それぞれの書いた作文を回し読みさせた。お互い読みあう中で、説得力を持たせるためにどのような工夫をしているかを読み取らせた。

よむYOMUワークシートでの取り組みをしていたこともあり、比較することや立場を決めて意見をかくということについてのイメージは持っていたと思うが、最初は社説の内容に難しさを感じていた様子であった。しかし、じっくりと言葉を調べながら文章と向き合う中で、理解を深め、ほとんどの生徒が作文を書き上げることが出来た。その中で、自分の意見をただ書き連ねるだけでなく、説得力を持たせるにはどうするかを、社説を吟味しつつ考えることができた。(図2)



(図2)

4. 成果と課題

本年度はNIE指定初年度ということで、「新聞を用いた言語活動を通じて語彙力と読解力を身につけさせる」というテーマのもと取り組もうと考えていたが、子ども達の実態から、まずは新聞に触れる、読むということを中心に取り組んだ。最初は新聞の開き方も分からない生徒もいた中で、記事を探すという形で目を通すよう促した。生徒は新聞の記事の難しい文章に苦戦しながらも、言葉を調べるなどして懸命に読んでいた。しかし、2年生の活動では記事を探す中で新聞に触れることにとどまっているので、来年度の活動では、3年生が行ったように記事についての作文を書いたり、比較したりするなどの言語活動に広げていきたい。また、1年生、2年生に対しての活動も計画し取り組んでいこうと思う。

冒頭のアンケートにもあるように、生徒が新聞に触れるタイミング自体が大変少ない。理由としては、まずは、新聞を購読している家庭が減ったことや、SNS等の普及により新聞以外の媒体で情報を得るようになったことが挙げられると思う。新聞という媒体の特徴を生かして、文章の構成や表現、共通の記事の比較などを授業の中で扱うことで、来年度のテーマ「新聞を用いた言語活動を通じて、適切な情報の取り扱い方を身につけよう。」の活動を行っていききたい。

1. はじめに

本校では2004年の開校当初より国語科を中心に新聞を学習に活用し、平成30年頃からは学校で新聞を購読して全てのクラスに毎日一部を配布するようになった。以前は新聞コラムの視写を国語科の宿題として出していたが、最近では家庭での新聞購読が激減し、宿題とすることは難しくなった。きちんと新聞を読んだことがない生徒も増えてきている。そこで、実践一年目の昨年度は、新聞を通じてニュースや時事問題に触れ、さまざまな情報を正しく受け取り考える力を養うことをねらいとして、国語科を中心に取り組んだ。教科書の教材を用いた授業と比べて、新聞を活用した授業の方が生徒たちは意欲的に授業に取り組み、記事の内容や新聞に興味を持つ生徒が増えた。また、新聞を読むことは将来や今後の生活に役立つと考えた生徒も多かった。二年目の今年度は、国語科中心の活用から他教科での活用へと広げ、学校全体での取り組みを目指して実践を行った。

2. 実践概要

実践対象 1年生～3年生全クラス
実践教科等 国語科、社会科、終わりの会
実践期間 令和6年4月～令和7年3月

3. 実践内容

(1) 終わりの会（全クラス）

各クラス2名の新聞係のスキルアップを図るため、マニュアルを作り、スピーチの仕方を指導した。スピーチメモや原稿を書かないと不安な人は原稿シートを活用するように伝え、スピーチをした新聞記事を掲示シートに貼って教室の後ろの作品ホルダーに入れて掲示した。新聞係が記事選択の幅を広げたり、内容を掘り下げたりできるように、各担任に協力を依頼した。全ての生徒がさまざまなニュースや時事問題に触れる機会として学校全体で取り組んだ。中には毎回きちんと下書きをして記事を紹介する係もいて、活動が活性化された。

新聞記事をもとに「1分間スピーチ」	
① メッセージ（読者のために） ② 補足情報（なぜ？ どういうこと？） ③ 影響や意義（どんな効果？） ④ コメント（なぜこの記事を選んだの？ どう思った？ 賛成・反対やアイデア）	⑤ 1分間で読める字数は300字程度。 ⑥ 原稿を上げるときは必ず原稿用紙を添えて提出する。 ⑦ 時間がない場合はあらかじめ新聞や記事を事前に読む。 ⑧ 新聞指定でテーマを決めても、（みんなから募集） ⑨ 「今日の注目記事」「私の注目ニュース」「この人に注目」「地方のニュース」「多岐のニュース」 ⑩ 新聞のニュース

(2) 国語科

①全学年「元日新聞コラム読み比べ」

本校の新年の恒例行事であるが、今年はコラムを読む前に、どのような内容が書かれているかを予想させた。新年最初のコ

ラムなので、何かの節目の年、あるいは話題になっている時事問題が取り上げられることが多いことを話すと、次々と意見が出た。コラムに取り上げられた戦後80年、能登半島地震から1年という出来事だけではなく、阪神淡路大震災から30年という声も上がった。この予想を立てるだけで生徒は興味・関心を持って読み進めることができた。グループ活動では、歴史的な内容について疑問や意見を活発に交流しているところもあった。

②2年「メディアを比べよう」（光村図書）

6/21付の各新聞社の一面を比較し、将棋の叡王戦第5局の結果の記事に注目して比較させた。一面にはなく社会面に掲載されている新聞もあり、記事の分量にも差があった。同じだったのはタイトルの表現である。主見出しが「藤井聡太叡王敗れる」といった内容で、袖見出しが「挑戦者伊藤匠七段が勝利する」といったものであった。生徒からは、読者の関心は叡王の勝敗かもしれないが、挑戦者の勝利を主見出しにしてもよいのではないかと意見が出た。一紙では気づかない視点で記事を読むことができ、記事の取り上げ方が新聞によってさまざまであることを実感していた。

③3年「報道文を比較して読もう」（光村図書）

教科書掲載の記事ではなく、11/20付の各新聞の一面に掲載された谷川俊太郎さん死去の記事を活用した。生徒たちは小・中学校で親しんだ詩人なので、熱心に比較し、共感や発見、驚きを話し合っていた。また、この日のコラムは全て谷川俊太郎さんについて書かれていたので、コラムの読み比べも行った。

④3年「新聞記事をもとに1分間スピーチをしよう」

全員に新聞一部を配布した。興味を持った記事を選び、新聞係のマニュアルを使って、4人グループでスピーチの発表を行った。手元に新聞があると、すみずみまで記事を探したり、友達の新聞と交換してもらったりして、熱心に記事を選んで紹介していた。



〈生徒の振り返り〉

- ・みんないろいろな記事を選んでいてスピーチを聞くのが楽しかった。自分は経済とか社会問題の記事をあまり読まないの、いい機会になった。
- ・様々な情報を読めるのがいいなと思いました。意外と読みやすかったです。
- ・ふだん新聞を読まないから読み方にとまどった。思ったより地域や社会など色々なことについてのおもしろかった。

(3) 社会科

① 2年歴史「開国と江戸幕府の滅亡」(東京書籍)

単元のまとめとして、「瓦版の社説を書こう」というパフォーマンス課題を設定した。江戸時代の瓦版(新聞)の社員として「社説」の執筆を担当し、当時の人の立場から「開国」が正しかったのかについて書く課題に取り組んだ。まず、社説の特徴と書き方を学習したあと、「開国」と「江戸幕府の滅亡」の関係について、根拠を踏まえ自分の考えを書いた。

〈生徒が作成した瓦版の社説〉

最近日本では開国をしたことで江戸幕府が滅亡し、天皇を中心とする政治へと変わった。この日本の開国により、起きた良くないことがたくさんある。そのため、日本の開国は正しくなかったと考える。例えば18世紀頃、産業革命が起こったイギリスは清やインドと不公平な貿易(三角貿易)を行っていた。さらに清の開港自主権をなくすなど、領事裁判権を認めさせる、南京条約を結ぶなどしてアジアへの支配を強めていた。日本の開国にあたって、アメリカと日米和親条約や日米修好通商条約のような不平等な条約が結ばれたり、(下の資料)金銀の交換比率の違いにより海外に大量の金を持ち出されたり、国内の物価が上昇するということが起こった。そのため人々は幕府への不満を一揆や打ちこわしに表し、幕府はこれらの反発に対応することができず滅亡した。もし、開国をする時期や、条約の取引条件をもう少し変えられていればこのようなことにはならなかったかもしれない。例えば、幕府がアメリカから開国を求められた時に設けた、たった一年という返答までの期間である。アメリカに「慎重に考えたいから少し長い時間をくれ」と交渉すれば承諾される可能性はないとは言いきれないし、すべて争いで解決するのではなく、きちんと話し合う時間をとればもう少し平等に近い条約を結べたかもしれない。このように、日本が開国を行う時期を変えられた場合を考えると、この開国は正しかったとは言えない。



東京書籍、「金の流出」
『新しい社会 歴史』 p 165

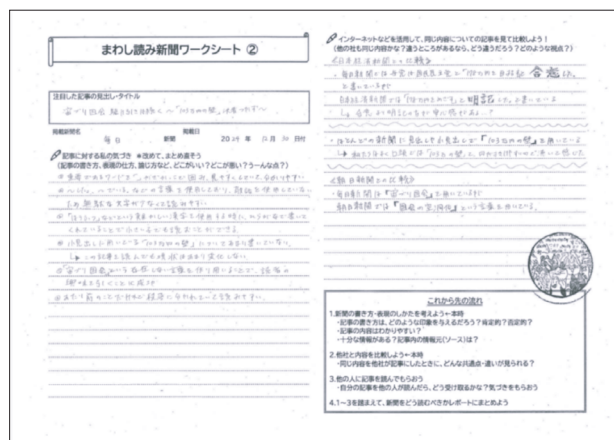
〈生徒の振り返り〉

- 自分が実際に書いてみんなの書いたものも読んでみて、人の数だけ意見があるし、共感できたからといって正しいとは限らないと思ったから、新聞などに書かれた意見について自分も考えながら読まないといけないと考えた。
- それぞれの新聞社は独自の考え方を持っている。メディアには意思があるということを踏まえてメディアを知らなければならぬ。
- 事実なのかを見極める必要もあるし、新聞に書かれていることは共感する部分もたくさんあるけれど、一つの視点だけで見るとはならず、いろんな視点から物事を見極める必要があると感じた。

② 3年公民「新聞を読むとき・内容を受け取るときに気を付けるべきこと」

批判的に読む力を身につけることをねらいとして課題を設定した。新聞を読んで記事を選び、その書き方や内容のわかりやすさ、情報の信頼性などを分析する。同じニュースについて、異なる新聞社の記事を比較し、どのような共通点や違いがあるのかを考える。自分が選んだ記事について分析した内容をグルー

プで読み合い、意見を交流する。話し合いを基に、新聞を読む際に注意すべき点について自分の考えをまとめた。生徒は、情報の信頼性を確かめながら読み、書かれていることをそのまま受け入れるのではなく、批判的に読む視点を意識することができた。



〈生徒の学習のまとめ〉

- 主観的な文章だと、実際の状況が適切に伝わりづらく、書き方によっては誤解の種になる可能性もあると考えられる。そのため、新聞を読むときには表現に惑わされず、実際はどうかを複数の記事を比較する必要がある。
- グループで新聞の回し読みをしてみると、自分が読んだときには気づくことができなかった意見をたくさん知ることができた。例えば、記事が縦にまとまっていたりわかりやすくていいとか、見出しが強調されているところに注目している人が多かった。私は、内容やグラフについての気づきばかりで、そのような部分には気づいていなかったの、グループでの交流を通して新しい見方ができてよかった。このことから、一つの新聞の内容に対しても、様々な見方ができることを学ぶことができたので、様々な視点で記事を読むように気をつけることでより多くの発見が得られると考える。

4. 成果と課題

今年度は、これまでの国語科中心の活用から、社会科や係での活用へ広げることができた。学校全体での取り組みとまでは言えないが、新聞や記事の内容に興味を持つ機会が増え、情報を正しく受け取り、考える力を養う一助となった。この2年間の実践で、さらに様々なアプローチで新聞を学習に活用できると感じた。新聞係の活動では、〇〇週間・月間として記事を選んだり、地域のニュースや授業で学習している内容や行事に関連するタイムリーな記事を取り上げたりするなど、まだまだ工夫ができそうである。また、国語と社会の授業では、あとから二つの教科を担当する4人でもっと話し合い協力すべきであったと反省した。例えば、3年生の社会の授業は、同じ学年の国語の授業で「批判的に読む」学習と「批評文を書く」学習をしているので、同時期に並行して授業を進めればもっと効果的に学習を進められたと考える。学校全体の取り組みとして実践していくためには、普段から教員が互いにコミュニケーションをとり、それぞれの授業を参観し合うなどして、協働的に授業を作り上げていくことが大切だと感じた。

新聞読み比べ！阪神・淡路大震災の記事を通して ～多面的・多角的に考察する力をつける～

和歌山市立河北中学校 下地 浩平

1. はじめに

現代社会において情報を的確に読み取り、自ら考え、表現する力が求められている。本校では今年度からNIE実践校の指定を受け、その力を育むためにNIEを活用した授業をおこなった。

生徒に新聞に関するアンケートを行ったところ、自宅で新聞を購読している家庭は約2割にとどまり、新聞をまったく読んだことのない生徒は約3割に達した。活字離れ、新聞離れを感じる結果となった。その中で、NIEを通して生徒たちにどのような力をつけていくべきか、どのように新聞の魅力に気づかせていくかを考えた。そこで「新聞」とは何かということを問い直すことにした。筆者なりに考えた新聞の魅力を次の3点に整理した。

- ①記者が取材し、編集部がチェックしたうえで発行されるというSNSやネットニュースに比べて信頼性の高い情報である点
- ②速報性に重点を置くテレビやネットニュースに比べ、新聞は背景や分析を詳しく報道している点
- ③社説やコラムがあり、記者や専門家の多様な意見を読むことができる点

この新聞にしかない魅力を生徒と共有しつつ、多面的・多角的に事象を考察し、自分の考えを形成できる力をつけたいと考えた。そこで、テーマを「防災学習」にしばらく2年間の授業実践を積んでいくことにした。

2. 実践概要

実践対象 1年生全クラス
実践教科等 社会科、総合的な学習、特別活動（校外学習）
実践期間 9月～3月

今回の取り組みで実施した内容は次のとおりである。

- ①総合的な学習及び社会科での事前学習
- ②社会科の授業での新聞記事読み比べ
- ③特別活動（校外学習）での現地学習
- ④社会科の授業での新聞づくり

3. 実践内容

（1）テーマ設定の意図

本年度は、実践の1年目ということもあり、手探りのなか研究がスタートした。その中で、「防災学習」にテーマを設定した理由は2つある。

1つ目は、実践する1年生が生まれた年が日本を襲った未曾有の災害である東日本大震災の年であったということである。災害に対する考え方や防災に対する人々の意識などが変化したこの年の出来事であったが、当時の震災のことや震災後の状況などを知らない生徒がほとんどである。和歌山県は今後数十年の間に南海トラフ巨大地震に直面することが想定されている。災害大国日本で自らの命を守り、家族の命を守り、災害後の避

難生活、復興街づくりなどを担っていく世代である生徒たちに、過去の災害から学び、これからの自分たちに活かしてほしいと考えたからである。

2つ目は、今年で阪神・淡路大震災から30年を迎えることから、広域ではあるが自分たちの生活圏内である関西地域を襲った阪神・淡路大震災を通じて、防災意識の向上やボランティア元年と言われることも踏まえて、自分たちの住む地域の防災についての取り組みに関心を持ち、具体的な対策や行動を考えるきっかけとしたいと考えたからである。

（2）実践時数

時数	教科	内 容
1	総合	1 阪神・淡路大震災を知ろう
2	社会	2 神戸の町はどのように復興を成し遂げたのだろうか？
3	社会	新聞から読み取ろう！ 5紙を読み比べる！
4	校外学習	フィールドワーク
5	社会	防災新聞を創ろう！
6	社会	～学んだことを私たちの防災に活かすには？～

（3）新聞に親しむ環境づくり

本校では、社会科の授業を行う専用教室に毎日の新聞を置き、いつでも、だれでも新聞を手に取り読むことができるようにした。各社に分けて1週間分を棚の上に並べて展示し、近くに各社の社説等を掲示した。この教室は、3年生と1年生の社会科で使用する教室であり、3年生の公民的分野では、政治・経済・憲法などさまざまな場面での導入として新聞記事を取り入れることができた。1年生の生徒も新聞を手に取り、見出しや記事を読みながら友達と話題を共有したり、議論したりする様子も見られた。

（4）新聞記事の読み比べ

震災から30年の節目となる2025年1月17日付の朝刊5紙（地元紙である神戸新聞を含む）の1面記事を読み比べ、読み取った事実（Fact）、それに対する自分の考え（Opinion）、疑問・考えてみたい・知りたいこと（Question）を個人でワークシート（FOQシート）にまとめた。さらに個人で考えたことをグループで共有し、それについて議論を深めた。主なFOQシートからの抜粋は次の通りである。

新聞から読みとった事実(Fact)
・重軽傷者合わせて4万3792人 ・死者が6434人の方が犠牲になったこと。 ・いまだに3名の方が行方不明になっている。 ・地震が発生した時に出産した人がいたこと。 ・高齢化率が高い市町村は耐震化率が低くて被害が大きくなる可能性がある。 ・災害発生から30年たっても被害にあった人たちは深く心に刻まれている。 ・震災を体験した人の想いが、当時から30年経った今でも受け継がれている。

事実に対して自分が考えたこと(Opinion)
- 地震が発生して、しっかりと処置ができない時に発生してすごいと思った。 - 震災を体験していない自分たちでも、体験した人たちから話を聞き、それを受け継ぐことはできるから、もっと災害について学習するべきだと考えた。
疑問・考えてみたい・知りたいこと(Question)
- 地震が起きたときに第一に行動すべきことは？ - どのようにして街を復興させたのか？ - 避難所で中学生ができることはないか？

その後、CHALLENGE課題として「阪神淡路大震災の記事5紙を読み比べてあなたが考えたこと・感じたこと・気づいたこと」を書いてみよう！また、どうしてそう書いたのか、理由を具体的に書いてみよう！」という課題に取り組んだ。その際に出た生徒の考えは次のとおりである。

- ・各社ともに震災について具体的に記載されていた。(共通点)
- ・新聞社によってスポットを当てているところが違った。(相違点)



(5) フィールドワーク（現地調査）

2月上旬に神戸市を訪れ、人と防災未来センターを訪れたり、神戸市中心部の現地調査を行ったりした。新聞記事の読み取りで出た疑問を中心に情報収集を行った。

(6) 新聞づくり

新聞記事の読み取りとフィールドワークを踏まえ新聞づくりに取り組んだ。新聞に記載する条件を次のように設定した。

★阪神淡路大震災について

事実・それについて感じたこと→新聞読み比べの授業を参考に
フィールドワーク→校外学習で学んだことを参考に

★南海トラフ巨大地震にむけて

対策（どうすればいい？）

校区内について（危険な場所や安全な場所など）

自分たちができること（どうすればいい？）

4. 成果と課題

NIE実践校となり教室に新聞があることで新聞が身近なものになり、生徒たちが主体的に新聞に親しむことで魅力やおもしろさに気づくことができたと感じた。新聞を自然と手に取り、一人で読み込んだり、友達と記事について語り合ったりという光景が毎休憩時間にみられたことは1年目の成果と言える。

一方で、一部の授業での活用にとどまったことは課題といえる。社会科以外の教科の授業や休憩時間、HR等あらゆる場面で新聞を活用し学校全体での取り組みへと広げていき、さらに充実した活動にしていきたい。

防災新聞

荒川心咲

阪神・淡路大震災について

アマナイメージズ出典

阪神・淡路大震災で発生した揺れの大きさは震度7を観測しています。地震で命を落とした人は、6434人います。その中の多くの人は圧死で亡くなりました。大きなビルが倒れたり、高速道路の橋脚が折れるなど兵庫県南部は想像を超える破壊力をもった地震でした。

防災日本一読売新聞オンライン出典

南海トラフ地震に向けて

いつ強い地震が来てもいいように、防災バッグを用意したり家族で避難経路を確認しておくなど避難している時に家族とはぐれても、避難場所で見えるからです。

防災バッグには、水やトイレ食べ物、安全確保用品を入れておくとうれしいです。

フィールドワーク

「地震の痕跡」

Feel KORE出典

ちかくにある危険

どこにでもあるブロック塀が歪んでいてそれが地震で倒れてきたときそこを通る人がいたら、その人はブロック塀の下敷きになってしまいます。なので、地震が来たら倒れてきそうなものがない道路の真ん中に逃げましょう。

阪神・淡路大震災を踏まえた防災対策 阪神・淡路大震災、対応と現在

阪神・淡路大震災は30年で被災したとは思えないほどの大都市になりました。その時の対応はとても迅速だったと思います。少しだけ紹介したいと思います。

まず1つ目はボランティアへの対応がしっかりしており、動ける人間が他の地震より多かったことが挙げられます。また素早く水道やガスなどが復興したことも関係していると思います。

ですが、この地震は府よりボランティアの方が動いていたらしく、そこは疑問に思いますよね。

また校外学習で学びに行った際はわかりやすく神戸のタワー周辺を見ると、道路や橋などが被災前の神戸よりも、もっと頑丈できれいになった印象がありました。

南海トラフ巨大地震に備える

皆さんはいつ起こるかわからない地震に備えていますか。

私は大丈夫だと思って備えていなかったりしていませんか。

地震はいつ来るかわかりません。だからこそ、備えというものは周りのためにも自分のためにも必要なことです。もし備えができていない状態で地震が起これば、食糧も飲み物もなく、空腹の2日間以上を過ごすかもしれません。

困ったときはお互い様という言葉はありますが、地震時にそんなことを行っても誰も聞く耳を持ってくれないはずです。なぜなら自分の家族を皆さん優先されることでしょう。その時になって後悔しても遅いんです。だからこいつ起こるかわからない地震に備える必要があるのです。

防災バッグチェック

必要なものを見てみましょう。

水	最低3日分	保存食	最低3日分
携帯ラジオ	(手動順電)	マッチろうそく	おかし
使い捨てカイロ	救急用品	防寒具	衣類
女性、子どもの場合 防犯ブザーやホイッスル			



下村天音

「日常に新聞を ～まずは新聞に親しみ、読んでまとめる～」

新宮市立光洋中学校 和谷 征幸・小西 純平・板持 彩

1. はじめに

本校は、今年度初めてNIE指定校として認定され、新聞を活用した取り組みの実践を行った。生徒にとって新聞というメディアは大切なものであるという認識はありながらも親しいものではなく、日常的に読んでいるものではなかったため、まずは、気軽に新聞を手に取り、記事を読むことを目標に取り組みを開始した。1,3年生は新聞記事を読み取る活動を経て、まとめる活動を中心にを行い、2年生は修学旅行に向けての平和学習の一環として新聞を活用した。

2. 実践の概要

- ・実践対象学級 1～3年（AB各2クラス）
- ・実践教科など 総合的な学習の時間
- ・実践時期 1年生（1月～3月）、2年生（6月～9月）、3年生（10月～1月）

《1学年 NIE実践報告書》

①実践の内容

○新聞アンケートの実施

新聞の取り組み前に事前アンケートを実施した。

内容は以下の通りである。

「新聞を読んだことがある」

はい（47.1％）・いいえ（52.9％）

「新聞を読みたいと思う」

はい（21.6％）・いいえ（78.4％）

「新聞を読むことは大切だ」

はい（68.7％）・いいえ（31.3％）

新聞を読むことは大切だという認識があるが、読んだことがなかったり、読みたいと思っていない生徒が多いことが分かった。

○新聞を教室に置く

新聞を読む経験がない生徒が大半を占めることから、まずは新聞に触れることから始めた。毎日の朝刊を教室に置くと、朝の読書の時間や休み時間に読んでいる生徒が数名いた。

○「新聞記事を読み取りまとめる」活動

まずは気軽に新聞を手に取り、興味のある記事を読む活動から始めた。気になる記事をワークシートにまとめ、要約する活動に発展し、最終的には、気になる記事以外の課題記事を深く読み込み、自分の意見を踏まえながらまとめる活動に発展させた。

②指導のポイントや工夫

アンケートの結果から、新聞になじみがない生徒が多いことから、まず気軽に新聞に触れることを目標にした。興味がある記事を読むことからスタートし、新聞へのハードルを下げ、徐々に課題の記事を提示し、深く読めるようにハードルを上げた。その上で自分の意見を踏まえながら感想が書けるようにしたことで、生徒が新聞を読むことに対して主体性を持ち取り組むことができた。



③生徒の感想 <生徒のふりかえりから>

- ・最初は新聞に対してよむのが面倒くさいと思っていたが、読解力をつけるなら新聞が最適だと思った。
- ・新聞はあまりくわしく読んだことがなかったので見出し以外にも読んでみて文字でわかりやすく書かれていてテレビより詳しく知れるものもあって今後も読んでみたいと思った。
- ・新聞の活動に取り組んでみて、そこに書かれてある主要部分を見つけることがしっかりできるようになったと思う。

④新聞の置き場所や整理方法の工夫

教室の前の机に新聞をストックするスペースをつくり保管した。その日の新聞は教卓に置き、生徒が手に取って読みやすいように工夫した。

⑤成果と課題

○新聞事後アンケートの実施

新聞の取り組み後に事後アンケートを実施した。内容は以下の通りである。

「新聞の活動に意欲的に取り組めたか」

はい（95.3％）・いいえ（4.7％）

「新聞を読んでみてどんな感想を持ったか」

思っていたよりも面白かった（72.1％）

新聞の活動をする前と変わらない（27.9％）

「新聞を読むことは大切だと思ったか」

はい（90.7％）・いいえ（9.3％）

「新聞を読むことは、自分の読解力（文章を読む力）を鍛えるのに役立つと思うか」

はい（97.7％）・いいえ（2.3％）

新聞の活動に意欲的に取り組めた生徒が多く、読んでみると思っていたよりも面白かったという感想が多かった。また、新聞を読むことが大切だと思う生徒の割合が格段に増えた。自分の読解力を鍛えるのに役立つと回答した生徒が大変多く、生徒にとって有意義な活動になったことが分かった。

⑥学年団で教員の協力体制をどう組み立てたか

NIE担当教員が学年に所属していたので、担当教員を中心に活動を立案し、学年会などでアイデアを出し合った。担任が主体となって進めたが、ワークシートの作成などは、担当教員と学年主任が行い、活動時は副担任も教室に入り、学年全体で協力した。

⑦学力形成のために今後、新聞記事を活用してどのような

授業実践が考えられるか

各学期に数回でも良いので定期的に新聞記事を読み、要約し、自分の意見を踏まえながらまとめる活動を入れる。

《2学年 N I E実践報告書》

①実践の内容

今年度、2学年は12月に沖縄県に修学旅行を予定していたので、沖縄県に関する内容を選んだ。この記事は、沖縄県那覇市安里にある米町市場の真ん中にある「ひめゆりピースホール」という施設の話である。こ



こは、過去に「沖縄師範学校女子部」や「県立第一高等女学校」があった場所である。戦後、この場所にひめゆり平和祈念財団が1967年にひめゆり同窓会館を建て、ひめゆり平和祈念資料館建設活動の拠点となった。この建物の2階が現在の「ひめゆりピースホール」となっており、現在も平和と文化を発信している。この施設の取り組みの大切さと、沖縄戦の歴史についてこの記事から学んだ。

②指導のポイントや工夫

生徒たちが、修学旅行で1番楽しみにしていることが、国際通りである。今となっては、多くの観光客でにぎわうこの場所も過去には悲劇があったことを忘れずに沖縄を訪れて欲しいと思い、記事を元に指導した。

③生徒の感想

- ・沖縄戦の悲惨さを知ることができた。
- ・旅行を楽しみながらも過去にあった沖縄戦を忘れずに、修学旅行に行きたいと思った。

④新聞の置き場所や整理方法の工夫

学級文庫の近くに置き、朝の読書の時に、気軽に新聞を読めるようにした。

⑤成果と課題

朝の読書の時間に、読書に取り組みにくい生徒が新聞を読んでいる姿が見られた。

⑥学年団で教員の協力体制をどう組み立てたか

実践する内容について、職員で話し合いをし、記事の選択も協力して行った。

⑦学力形成のために今後、新聞記事を活用してどのような

授業実践が考えられるか

活字離れが言われているので、新聞を読むことはとても効果的である。ただ、生徒が読みやすい記事、社会科等で使えるようなグラフや資料をこちらでピックアップして、授業で実践することが必要と感じた。

《3学年 N I E実践報告書》

①実践の内容

○新聞アンケートの実施

新聞の取り組み前にア

ンケートを実施した。新聞を購読している家庭は約30%という結果で、全体的に新聞にあまり関りがなかったことが分かった。また新聞を購読している家庭の生徒で、「毎日読んでいる」または「ときどき読んでいる」と回答したのは約40%の6名で、新聞を読む習慣がないことが分かった。

○新聞を教室に置く

新聞を読む経験がない生徒が大半を占めることから、まずは新聞に触れることから始めた。毎日の朝刊を教室に置くと、朝の読書の時間や休み時間に読んでいる生徒が1、2名いた。



○「新聞読んでみた新聞」の作成

新聞から興味をもった内容の記事を探した。その記事を用いて、調べたきっかけ、記事を読んで分かったこと（要約）、さらにクロームブックでさらに調べたこと、まとめや感想について新聞形式でまとめた。名付けて「新聞読んでみた新聞」を各人が作成した。

②指導のポイントや工夫

アンケートの結果から、新聞になじみがない生徒が多いことから、まず新聞に触れることを目標にした。新聞を読んで疑問に感じたことや、さらに詳しく知りたいことについてインターネットで調べて書くことで、自分の考えや想いを文章に表す取り組みとなった。また新聞形式でまとめることで新聞作成の苦労や想いも知ることができた。

③生徒の感想 <生徒のふりかえりから>

- ・普段あまり新聞を読まないけど、今回の取り組みで新聞には色々な地域の情報やニュースなどがあると知り、もっと新聞を読みたいと思った。
- ・新聞を読むことによって普段あまり知ることのできない世界情勢などについて詳しく知ることができて、またサッカーなどのスポーツの試合結果も載っていて興味を持って読むことができました。
- ・自分自身新聞をたまに読むけど一つの記事について調べたことでよりその記事への理解が深まった。また、今の社会ではインターネットを使うことが主流だが新聞には新聞の面白さがあることもわかった。
- ・読んで貰う人により伝わるように文章を書くことが大変だった。自分で作ってみて少しだけ新聞に興味が湧きました。
- ・新聞を読んでさらに新聞を作ると言うのはとても新しかったので楽しかったし、更に調べることでもっと知識がついたと思う。



④新聞の置き場所や整理方法の工夫

教室の後ろの朝の読書のための書籍を置いているスペースに新聞も置いてみた。取り出しやすいように、日にちごとに立てて置いているクラスもあった。

⑤成果と課題

新聞の取り組み前にアンケートを実施した。新聞を購読している家庭は約30%という結果で、全体的に新聞にあまり関りがなかったことが分かった。また新聞を購読している家庭の生徒で、「毎日読んでいる」または「ときどき読んでいる」と回答したのは約40%の6名で、新聞を読む習慣がないことが分かった。事前アンケートでは、63%の生徒が新聞をすでによんでいる、機会があれば読みたいと回答した。「新聞読んでみた新聞」の取り組みをした後の事後アンケートでは79.5%の生徒が新聞を読みたいと回答し、新聞を読みたいという生徒が増加したことが明らかになった。

また、生徒の振り返りや感想から、今回の取り組みは生徒にとって新聞に接する良い機会だったと思われる。初めて新聞を読んだという生徒もいた。

⑥学年団で教員の協力体制をどう組み立てたか

学年団で取り組みの立案を行った。

担任が主体となって進めたが、生徒がもってきた記事をコピーするなど副担任も作成に協力した。

⑦学力形成のために今後、新聞記事を活用してどのような

授業実践が考えられるか

新聞から新たな知識等が得られること。

1. はじめに

本校がNIEの実践指定校となって4年目を迎えた。日々新聞を読むことの大切さや、情報の取捨選択をして知識をものにしなければならないことが実感として得られている印象である。学習面での課題を少なからず抱えている生徒たちではあるが、以下に紹介する「教養基礎」の実践では、日々新聞記事を基にしたコラムを読み、問題に取り組んでいる。また1年生では「総合的な学習の時間」に「新聞コンクール」への応募を目標に掲げ、新聞記事を活用した取り組みを行った。

2. 実践の概要

（１）「教養基礎」における新聞記事の活用

全校生徒を対象として、学校設定科目「教養基礎」（１単位）の授業を設けている。コラム読書・集団読書・自由読書の３本柱で取り組んでおり、授業時間における約３分の１は新聞記事を引用、抜粋した内容のコラムを読み解いたり、感想を書いたりするコラム読書に取り組ませた。

(2)「総合的な探究の時間」における「新聞コンクール」への応募

1 学年を対象として「総合的な探究の時間」の授業で、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募に向けた取り組みを行った。

(2)「総合的な探究の時間」における「新聞コンクール」への応募

N I E の指定校になってからの4年間、毎年1学年の「総合的な探究の時間」で日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募を目標に取り組んでいる。まず膨大な量の新聞記事から何を基準に選ぶか。自身はどのような感想や意見を持ったか。文章をどのようにまとめれば、より読み手に伝わりやすくなるか。事前に文章作成の基本として、動画を見て感想を書く練習をしたり、曲の歌詞について感想を書いたりした。新聞記事の選定が終われば、ワークシートを用いてペアワークやグループでの意見交流などを行い、自分の提言・提案を作成し応募に向けて取り組んだ。



3. 实践内容

（１）「教養基礎」における新聞記事の活用

[illegible]

この学習の目標のひとつに、新聞そのものをより身近に感じ、世の中を取り巻くさまざまな話題に関心を持つことがある。また、コラムの内容を読んで自分なりに意見を持つことや、それを文章で表現する力を身につける事をねらいとした。

[illegible]

コラム読書 (2025.1.14)

4. 指導のポイントや工夫

(1)「教養基礎」における指導のポイントや工夫

昨年度と同様に、記事の選定と問題の作成を7名の教員で順番に行った。担当教員は、国語、理科、商業、体育、芸術など多岐にわたっており、それぞれの視点から記事の選定を行うことができた。まずは新聞記事を身近に感じること、社会での出来事に関心を持つことを大きな目標として掲げ、コラム読書をきっかけに生徒自身が情報を掘り下げたくなるような記事選定を心がけた。「天声人語」や「社説」、時には「小学生新聞」「中・高校生新聞」などよりわかりやすい内容の記事を取り上げ、社会問題や地域を取り巻く話題などさまざまな視点からコラムを作成した。またコラムの問題作成にあたっては、漢字の読み書きや語句の意味を問う「知識・技能」の問題と自分の意見や考えを表現する「思考・判断・表現」に関わる設問を取り入れた。

さらに、毎朝の10分間をより集中した状況で取り組めるようにさまざまな体制を取り入れている。遅刻生徒が教養基礎の時間内は教室に来ることがないように、別室での対応を行うことや廊下監督や巡回指導の教員の配置などにも配慮した。

（２）「新聞コンクール」における指導のポイントや工夫

今年度も１学年で「総合的な探究の時間」を活用して、新聞コンクールへの応募を目標に取り組んだ。そもそも新聞を手に入る機会がほとんどない生徒たちにとって、関心のある記事を探し出すことや記事の内容をまとめること、さらに自分の意見を記述することは非常にハードルが高い。そこで図書館司書の先生に協力してもらい作成した、新聞記事をカテゴリー別に分類したファイルを用いて記事選定を行うようにした。



またワークシートを用いてペアワークやグループでの意見交流などを行い、自分自身の言葉で意見をまとめられるよう指導した。生徒の特性もさまざまなため、考えをなかなか文章に出来ない生徒や意見を共有することが難しい生徒もいた。しかし意見交流を複数回行うことで生徒間にもコミュニケーションが生まれ、クラスメイトの新たな一面も知れた活動となった。

５．成果と課題

教養基礎は、その名の通り本校の基礎を支える科目である。１５年以上続く朝の１０分間の取り組みは、生徒の読書習慣を促し、時事問題など自分たちにはない視点から情報を得るよい機会となっている。また、就職試験や進学的面接試験などでコラム読書での取り組みが役立ち、質問内容に対応できたという生徒も少なくない。

インターネット上にあふれている情報から確かなものを選び取ることは、我々大人であっても困難である。しかし、新聞は確かな情報を毎日私たちに届けてくれる。ＮＩＥの実践指定校としての取り組みは今年度で終わるが、「新聞コンクール」の取り組みは本校の生徒たちにとって大変有意義なものであった。今後もこの取り組みで得た、確かな情報を選び取る力を育めるような実践を積んでいきたい。

1. はじめに

昨年度の本校の授業におけるN I E実践は国語科の授業を中心におこなったので、今年度は地理歴史科の授業を中心におこなった。現行の学習指導要領では、地理歴史科の目標を「課題を追及したり解決したりする活動」を通して「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することとしている。また、歴史総合をはじめとする歴史系の科目においては歴史的経緯をふまえて「現代の課題」を理解・探究することが強調されている。そのため今年度は高等学校における歴史学習の総まとめとして新聞を活用した授業を計画した。

2. 実践の概要

対象：3年生の世界史選択生（2クラス34人）
 時期：12月
 時数：65分×6回
 内容：地球世界の課題についてのスライドの作成

3. 実践内容

（1）実践に向けて（4月～11月）

現行の学習指導要領は、生徒が世界の歴史の大きな枠組みと展開への理解を深め、地球世界の課題について探究することができる構成となっている。本校では年間を通じて教科書に掲載された「問い」について考える学習や、資料を活用しながら考察する学習をおこなってきた。そのため生徒の中にも歴史は「覚える」だけでなく、「考える」ことも必要であるという意識が強くなってきた。また、授業中に学習内容と現代との関わりについて時事的な内容を含めて学習を重ねてきたことで過去の出来事と現代のつながりについても生徒は意識できるようになってきた。

（2）実践（12月）

世界史の教科書の大部分が終了した12月にこれまでの総まとめとしてPowerPointを活用したスライドレポートの作成を始めた。世界史の授業はホームルーム教室ではない教室でおこなわれていたため、教室内のロッカーに4月から12月の新聞を月毎に日付順に入れ、生徒が日付を頼りに新聞記事を検索しやすいようにした。また複数紙がある月はそれぞれの新聞を分けて月毎の日付順に入れた。第1回の冒頭でレポートの作成要領と採点ルーブリック（下図）を示し、教科書に掲載されている探究の流れを参考にレポート作成の流れ（①新聞記事から現代の課題と考えられるものを探す ②その課題の形成

	0点	1点	2点	3点	
新聞の活用	特定の日の一社の記事のみを活用している	複数の日や複数社の新聞を活用している	—	複数の日や複数社の新聞を変化や違いを意識しながら活用している	
歴史的経緯①	課題の形成に関わる歴史上の出来事を教科書や図録で調べて書いている	課題の形成に関わる歴史上の出来事を教科書や図録で1つだけ調べて書いている	—	課題の形成に関わる歴史上の出来事を教科書や図録で2つ以上調べて書いている	
歴史的経緯②	教科書や図録で調べた歴史上の出来事を書いていない、もしくは羅列的に書いている	—	教科書や図録で調べた歴史上の出来事を相互に関連させながら書いている	—	
課題の現状 解決の条件	課題の現状と解決の条件のどちらも明示されていない	課題の現状と解決の条件のどちらかが明示されていない	—	課題の現状と解決の条件のどちらも明示されている	
構成	誤字・脱字があり、内容も適切にまとめられていない（長い文章のまま）	誤字・脱字がある、もしくは内容を適切にまとめられていない（長い文章のまま）	誤字・脱字がなく、内容も適切にまとめられている（簡潔な文）	—	
スライドの枚数	表紙や画像がメインのスライドを除いたスライドの枚数が5枚以下である。	表紙や画像がメインのスライドを除いたスライドの枚数が6～10枚である。	—	表紙や画像がメインのスライドを除いたスライドの枚数が11枚以上である。	
出典の明示	新聞の種類と日付、教科書や図録のページが明示されていない	—	新聞の種類と日付、教科書や図録のページが明示されている	—	
提出期限	提出期限内に提出することができなかった	—	提出期限内に提出することができた	—	

に関わる歴史的経緯を教科書や副教材および新聞から探す ③収集した資料を分析し、考察した内容をまとめる）を説明した。また、今年の主なニュースを月ごとにまとめたウェブページを提示して生徒がニュースを頼りに新聞記事を検索しやすいようにするとともに、テーマの例をいくつか提示した。

第2回から第6回は生徒が各自で新聞記事や資料を収集しスライドレポートをまとめる時間とした。生徒は各自の興味関心に応じて記事を検索し、記事を読み込むことで「聞いたことがある」という程度にとどまっていたニュースについての理解を深めることができた。さらに記事の中の語句を頼りに既習内容と照らし合わせながら経緯や背景などをレポートにまとめ、課題解決の条件や解決策についても考えることができた。レポートは冬休み中に完成させることとし、提出後にループバックにもとづいて採点してから返却した。



4. 指導のポイントや工夫

事前の聞き取り調査では、生徒の中で新聞をよく読む生徒はほとんどいなく、家庭で新聞を定期購読している生徒も決して多くはなかった。高校生にとって新聞が身近なものではなくなっているなかで、まずは新聞の強み（①あらゆる分野の情報が網羅されている ②一つ一つの記事が厳しいチェックを経て世に出ている ③信頼性の高いメディアである）をしっかりと説明し、知らない語句を調べながら記事をしっかり読むことを意識させた。また、複数紙を比較しながら読むことで全体の理解度が向上することも付言した。新聞記事と既習の世界史の内容を結びつけることが難しい生徒については教員が作成過程を見ながら適宜、ヒントを与えた。

新聞の閲覧については、新聞を置いている教室に生徒が授業ごとに来るため新聞の移動の手間を省くことができた。また、全員が必要に応じて全ての新聞を閲覧できるように新聞の持ち出しや切り抜きは禁止した。生徒には各自のタブレットで必要な記事を撮影して手元に残しておくように指導した。

5. 成果と課題

完成したレポートのテーマではパレスチナ問題に関わるものが多かった。これは時期的なものもあるが、第一次世界大戦中のイギリスの二枚舌外交や第二次世界大戦中のナチスによるホロコーストなど、ユダヤ人について授業中に何度も取り上げた結果であるとも考えられる。その他にもウクライナ問題に関する記事とロシアの歴史を結び付けて考えたものや、アメリカ大統領選挙に関する記事とアメリカの歴史や政治体制を結び付けて考えたものなど、現代の出来事と歴史上の出来事をつなげて理解を深めることができていたものが多数あった。生徒の中にも「歴史上の出来事が現代にまで影響を与えていることがよく分かった」「歴史的背景を知ることによってニュースの理解度が上がった」という感想をもつ者がいた。また、記事や資料を読み込む中で複数の資料を比較しながら読む力が養われたことも成果としてあげられる。

一方、課題としては今回のような授業が年間を通じて1回だけになってしまったことがあげられる。新聞の活用方法を決めるのに時間がかかってしまい、年間計画の中に効果的に位置づけることができなかった。学習指導要領においても新聞の活用が示されているが、当時を知るための歴史資料としての活用が多く、同時代の新聞の活用については計画的におこなうことが難しい側面もある。しかし、授業中に時事問題について話す際に新聞を見せながら話すことで記事への興味を喚起することもできたのではないかなと思う。今年度の実践を足掛かりに年間を通じて新聞を活用した授業のあり方についてもしっかりと考えていくことができれば生徒の読解力や思考力の育成に有用な使い方ができると考えている。

編集後記

和歌山県NIE推進協議会 副会長 竹内 圭
(和歌山市立教育研究所 所長)

NIE実践報告として、県内の中学校4校、高等学校2校の実践が今回、実践報告書としてまとめられています。どの実践を読ませていただいても各校の先生方の生徒に対する思いと生徒の主体的な学びを引き出すための工夫が詰まった実践であり、この実践報告書を手に取った他校の先生方には今後の取り組みのヒントとして活用していただければ幸いです。

6校の実践報告を拝読し、まず一番に思ったのは、子供たちの新聞に対する意識です。今の子供たちはそもそも小さい頃から自宅に新聞がないという環境が多く、保護者が家で新聞を読んでいる姿を目にしていないということです。新聞よりも携帯電話、スマートフォン、タブレット端末などのICT機器が生まれてから当たり前のようである環境で育ってきました。一昔前なら学校から授業で新聞を使用するので持ってくるように連絡するとほとんどの子供たちは持参してきましたが、最近ではそういうことも難しくなっており、学校が準備するケースが多くなっています。各学校の新聞に対するアンケート調査を見ても、どの地域でも新聞購読率はかなり低くなっていました。どの学校も新聞を活用した取り組みを進める上で、前提として新聞というものの自体が身近なものではない子供たちに対していかにして手に取ってもらうかを工夫することが求められています。

2つ目としては、新聞の魅力について教員がしっかりと教材研究を行い、子供たちにつけたい力を検討・整理し、年間の授業計画を立てて取り組んでいるということです。2024年7月に日本新聞協会NIE委員会が発表したNIE学習効果調査結果によると、NIEの実践に取り組んだ学校では子供たちの「読む力」「書く力」が向上したという報告がありました。「読む力」では、読む速さや理解度が増し、要点をつかむ力、情報の取捨選択する力がついたこと、「書く力」では、書く速さが速くなり、要約力、記事の内容を根拠に自分の考えを書く力がついたとのことでした。新聞を授業で活用することだけが目的ではなく、子供たちにつけたい力をつけるための一つの有効な方法として新聞の活用が大切だと考えます。

3つ目はICT活用とのつながりです。最初にも、少し触れましたが、現代社会では子供だけでなく大人も含め、誰もがICT機器に何らかの形で関わり、毎日の生活にはなくてはならないものになったといっても過言ではありません。NIE実践についても同様で、新聞がICT活用かの選択ではなく、どちらも持っている魅力や特性を生かすことが子供たちにとってはこれからの予測困難な時代を生き抜く力につながるのではないのでしょうか。今回の実践の中でも新聞を使って学習を進めながら、わからない言葉または興味を持った内容についてタブレット端末を使って調べる、そして発表や報告のためにまとめる、表現するという活動が報告されていました。実際の新聞を読み比べ、読者に伝わりやすいように工夫された紙面のレイアウトを参考にオリジナル新聞などを作成していました。今後はますますデジタルとの融合を模索した取り組みが増えていくのではないのでしょうか。

最後に、全ての報告でありましたが、子供たち同士のコミュニケーション力の向上についてです。新聞を読むこと自体は、個人でじっくりと集中して行う活動ですが、新聞記事についての意見の交流、自分たちが作成する新聞についての話し合いなど、新聞を媒介として対話の機会が自然に生まれてきています。どの学習でもそうですが、課題解決のためには、自分とは異なる考えの仲間と交流し、互いに学びを深めていくことが大切です。文部科学省からの「令和の日本型教育」に示されている「個別最適な学び・協働的な学び」の実現のために、現在学校では子供たちが主体的に学びに取り組む授業改善が進められています。子供たちが、自らの課題に対して探究的に学んでいくためには、必要な情報を選択する力、資料を読み取る読解力そして自分の考えを相手にわかりやすく伝える表現力は欠かせません。全国的にも課題となっている力を、新聞を活用した学習が一つの可能性を感じさせてくれました。

結びになりましたが、本実践報告書をもとに新聞を活用した新たな実践が、今後ますます県内各地の各校種で生まれてくることを御期待申し上げまして編集後記とさせていただきます。今後よろしくお願いいたします。

参 考 資 料



教室で作った デジタル新聞、かべ新聞、 調査研究ポスターなどを 募集しています!

第2期募集期間: 令和7年4月1日～令和8年3月末

各学校の教室では、手書きやデジタルで毎年たくさんの創意工夫ある学級新聞、学習新聞、グループかべ新聞、調査研究ポスターなどが作られています。

「せっかく作った力作なのに、廊下に掲示したあとは捨ててしまうだけ」

「ほかの学校の人や地域の皆さんに見てもらいたいと思っても展示する場所がない」

「ほかの学校の同学年の人たちがどんな作品を作っているのか観賞したり交流したりしてみたい」
などと思ったことはありませんか。

その課題を「わかやまデジタルかべ新聞パーク」が解決します!

応募方法はとても簡単です。



①応募する作品を写真撮影して保存する(アナログ作品の場合)
(デジタル作品の場合は、PDFファイルで保存。写真撮影は不要)

②サイトの応募フォームに保存したファイルを貼り付ける
(作品募集要項は、右のQRコードからご覧ください)

https://nie.kiiminpo.jp/wall_news_form/

③送信ボタンをクリックして完了



「わかやまデジタルかべ新聞パーク」WEBサイトに、
第1期の作品が掲載されていますので、参考にしてください。

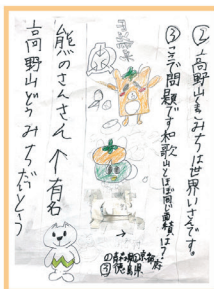
わかやま デジタルかべ新聞パーク

第1期応募作品から

橋本市立三石小学校(4年A組)



橋本市立三石小学校(4年B組)



田辺市立秋津川小学校(1・2年生)



白浜町立安宅小学校(5・6年生)



和歌山市立伏虎義務教育学校
(前期課程)(3年1組)



和歌山市立藤戸台小学校(5年生)



和歌山大学教育学部附属小学校
(6年A組)



和歌山大学教育学部附属小学校
(4年F組)

[illegible]

和歌山県立向陽中学校(2年A組)



和歌山県立向陽中学校(2年B組)



教室で作った
**デジタル新聞、かべ新聞、
調査研究ポスター**などを
募集しています!

第2期募集期間:令和7年4月1日~令和8年3月末

詳しくは右のQRコードから▶



2024年(令和6年)度
和歌山県NIE実践報告書

令和7年6月発行

【編集・発行】和歌山県NIE推進協議会
〒646-8660 田辺市秋津町100(紀伊民報社内)
TEL.0739(24)7171 FAX.0739(25)3094
URL <https://nie.kiiminpo.jp>

【印刷所】紀伊民報

